

# 中世における名詞「シサイ(子細・仔細)」の 意味と用法

－中世末期の口語資料を中心に－

劉相溶\*

---

## 目次

---

- 一. はじめに
  - 二. 本論
    - 1. 先行研究と研究方法
    - 2. シサイの意味
      - 2-1. 「事情・経緯・理由」の意味
      - 2-2. 「支障・問題」の意味
      - 2-3. 「論議・問答」の意味
      - 2-4. 「ところ・こと」の意味
  - 三. おわりに
- 

## 一. はじめに

『新明解國語辭典』は「シサイ(子細・仔細)」の語義を次のように解説している<sup>1)</sup>。

しさい【子細】簡単に言うことの出来ない、物事の詳しい事情。「－を語る」表記「〈仔細〉とも書く。

名詞「シサイ(子細・仔細)」(以下、シサイと略す)はこれまであまり注目されなかった漢語であると考えられる。その理由としては、現代日本語におけるシサイの意味と用法がかなり限定されて用いられることが挙げられる。

このようなシサイの語義を『大漢和辭典』には次のように解説している<sup>2)</sup>。

---

\* 専修大学人文科学研究所 特別研究員 日本語学

1) 金田一京助 他5名(2002)『新明解國語辭典』(第五版)三省堂

2) 諸橋轍次著(1984)『大漢和辭典(修訂版)』大修館書店

【子細】事のコまごましたわけ。こまかい事柄。精細。仔細。〔杜甫、山水圖詩〕野橋分<sub>二</sub>子細<sub>一</sub>、沙岸繞<sub>二</sub>微茫<sub>一</sub>。

『大漢和辭典』も『新明解國語辭典』と同様の語義解説をしていると考えられる。これに比べて、『漢語大詞典』にはシサイの意味を①細心・細致②小心・留神③清晰・分明④詳情・底細の四つに分けて、「清晰・分明」の用例として杜甫の[山水圖詩]を挙げている<sup>3)</sup>。

このような語義を持つシサイは、文獻による差異はあるが、現代日本語の意味と用法に比べて、中世時代の文獻には、シサイの名詞的用法や慣用的表現がより広い意味で用いられた例がみられる。

本稿は、名詞シサイの意味と用法を中世末期の口語資料を中心として考察を試みるものである。

## 二. 本論

### 1. 先行研究と研究方法

シサイの意味変遷に関しては竹浪聰の研究がある。竹浪は奈良時代から中世初期の文獻を対象にして、シサイの意味と用法の変遷を考察した。竹浪はシサイについて『古事記』からその例が見えると述べながら、『古事記』に用いられているシサイの用法は副詞的なもので、名詞的な用法は『今昔物語』に見えるのが最初のものであると指摘している<sup>4)</sup>。すなわち、日本の文獻では元々副詞の用法として用いられたものが中世に至って名詞的な用法に發達したことになる。

佐久間鼎はシサイを「理由・所存」を表す吸着語<sup>5)</sup>として分類し、次のように述べている<sup>6)</sup>。

3) 漢語大詞典編輯委員會 漢語大詞典編纂處編纂(1986-1994)『漢語大詞典』上海辭書出版社

4) 竹浪聰 (1983) 「「子細」について (上)」『日本芸論集』第9号 山梨英和短期大學日本文學會 34~53頁  
古事記には次の1例が見えると指摘し、意味は「こまかに」であると述べている。

於焉、惜舊辭之誤忤、正先紀之謬錯、以和銅四年九月十八日、詔臣安萬侶、撰錄稗田阿禮所誦之勅語舊辭以獻上者、謹隨詔旨、子細採。

5) 佐久間鼎(1940)『現代日本語の語法』厚生閣 409頁

佐久間鼎は「吸着語」を次のように説明している。

これを前に述べた「準用」といふところから見ると、普通には「詞」と認められるやうなものでありながら、それだけでは實質的な、具体的な意味をもたないで、何か内容を示す他の語句を承けて、それと共どれかの品詞の資格を得るもの、いひかへると、前に来る語句に何か品詞の資格を与へるものといふことが出来ます。

かういふ役目を帯びて使はれる語詞は、最初考へたよりも、かなり多いことが見出されます。さうして、その中に前述の意味での「詞」として取扱はれるものもあるし、また「辭」と考へられるものもあります。その「詞」として取扱はれるものにしても、まったく自立することができるものではなくて、何かの補充の語または語句を求めるものなのです。特に一つの句、または節を承けることができるといふはたらしに留意したいのです。かういふ種類の語を一つにまとめて、「吸着語」といふことにしま

つぎに、理由や所存をいいあらわす「形式名詞」を幾つか挙げる事が出来ます。ふるくは「ゆゑ(ゆゑん)、道理、心底、所存、仔細」などが、そういう用法を以て話されたものかと思われます。たとえば『天草本伊曾保物語』に、

この難にあふ事、もつとも**道理**ぢや、わがために善いことをば卑しめ、仇となるものを慢じた**故**じや。

なにとした**子細**ではし御座るぞ。

あれに逃げう**道理**がないと、……

こういう語詞は、今日では普通には使われないのですが、それに類するものが同様にある程度まで体言的に使用されることを注意すべきです。

佐久間はこのようなシサイを現代日本語には用いられないものとしてみている。また、井手至は「原因・理由」を表す形式名詞として「わけ・せい・いわれ・故・仔細・ゆえん・あげく・ため」を挙げ、シサイを形式名詞として分類している<sup>7)</sup>。

結局、佐久間と井手はシサイを形式名詞に近いものとして分類していることがわかる。

本稿はシサイを日本の中世末期の口語資料を中心として、日本資料は「狂言」(「大藏虎明本」、場合によっては「大藏虎清本」「大藏虎寛本」「大藏虎光本」も参考にする)・「抄物」(応永二十七年本『論語抄』・清原家『論語抄』)を対象に考察を試みる。また、外国資料としてはキリタン資料の中で天草本『平家物語』と『イソボ物語』を主な考察の対象にした。

研究方法としては、中世末期の口語資料に見えるシサイの意味を「事情・経緯・理由」「支障・問題」「議論・問答」「ところ・こと」の四つに分けて考察する。

シサイの意味を四つに分類した理由は、中世の文献で用いられているシサイを分析した結果、シサイの本義である「事情・経緯・理由」が今昔物語集や中世の口語文献においても広く用いられていたため、一つの項目として分類した。「支障・問題」「議論・問答」を意味する用法は、慣用的な表現として『平家物語』などの文献にはその例が見えるが、中世の口語資料にはその例が激減するため別の項目として分類した。これに對して、「ところ・こと」を意味する

せう。

また、「吸着語」を「人に關するもの」「物に關するもの」「事に關するもの」「事態・様態に關するもの」「所に關するもの」「時に關するもの」「程度に關するもの」「事由・所存に關するもの」のように8分類している。

6) 佐久間鼎 (1983年復刊)『現代日本語の表現と語法』くろしお出版 60~61頁

また、注意すべき語詞として次の「わけ・はず・つもり」を挙げている。

その**わけ**を話してくれないか。

もう、とっくに着く**はず**だがネ。

自分では、間違っ**ちやいな**い**つもり**だ。

7) 井手至 (1967年)「形式名詞は何か」『講座日本語の文法3』明治書院 37~52頁

井手は、現代の口語において使用されている形式名詞を先行してそれを修飾する語句の内容に基づいて、「人…ひと・者・かた・やつ等」「物…物・分(ぶん)・方(ほう)・やつ・の等」「事…こと・点・の・むね・よし・ところ・次第等」「時…時・折・頃・場合・あいだ等」「場所…ところ・ところ・あたり・きわ等」「様態…風・分・通り・ふり・様子・ぐあい等」「程度…ほど・分・ばかり等」「目的…ため」「原因理由…わけ・せい・いわれ・故・仔細・ゆえん・あげく・ため」「意思…つもり・氣・考え・所存・心底・予定」「蓋然態…はず」「代償…かわり」のように11分類している。

シサイは中世の口語資料に最初に見当たる表現であると考えたので、以上の結果に基づいて、シサイの意味を四つに分けて考察を試みた。

このように意味分類した各項目を形態的に分類して、意味との関連性を考察した。

さらに比較対象の文献がある場合（論語抄の場合は「清原家本」と「応永二十七年本」を、天草本『平家物語』の場合は原據本といわれる<sup>8)</sup>覺一本と比較する。）、文献の比較を通してシサイのより具体的な意味を考察する。

次の〈表1〉は各文献に用いられているシサイの例を挙げたものである。

〈表1〉口語文献におけるシサイの分布

文献	虎明本狂言	平家物語		イソボ物語	論語抄	
		覺一本	天草本	天草本	応永二十七年本	清原家本
用例数	130例	35例	35例	10例	16例	12例

## 2. シサイの意味

### 2-1. 「事情・経緯・理由」の意味

「事情・経緯・理由」の意味に用いられるシサイを形態的に分類してみると、「（その）シサイ＋用言」「シサイがある（ない）」「そのシサイは」の三つに分けられる。このように三つに分けた理由は、シサイの名詞的な用法は「シサイ＋問う・訪ねる」などの動詞類を伴って用いられるのが一般的だったと考えられるが、中世末期の口語資料においては「シサイがある（ない）」の表現も見えるため、この二つを「（その）シサイ＋用言」「シサイがある（ない）」に分け、さらに「そのシサイは」は、中世末期以降の口語資料にその例が見えるので、別の項目として扱うことにしたためである。

まず、「（その）シサイ＋用言」に関して考察を試みる。

#### 2-1-1 （その）シサイ＋用言

「（その）シサイ＋用言」の形態で用いられる例を用言を、中心として整理したのが次の〈表2〉である。

8) 清瀬良一(1982)『天草版平家物語の基礎的研究』溪水社

〈表2〉「(その)シサイ+用言」における用言の分布

文獻	虎明本狂言	平家物語		イソボ物語	論語抄	
		覺一本	天草本	天草本	応永二十七年本	清原家
用言	言う 7例	申す 5例	申す 3例	申す 1例	問う 1例	言う 1例
	知る 7例	問う 4例	知る 1例	述べる 1例	ことわる 1例	問う 1例
	聞く 6例	尋ねる 2例	問う 1例			知る 1例
	語る 6例	奏聞する 1例				
	存ずる 6例	ふれる 1例				
	申す 3例	存知る 1例				
	問う 3例	知る 1例				
	請給う 1例	のたまう 1例				
	仰せる 1例	存ずる 1例				
	呼ぶ 1例					
總計	41例	17例	5例	2例	2例	3例

(1)(男)「松尾の大明神を別と仰せらるるいはれは、何とした事で御ざるぞ(福の神)「しらぬか(男)「いやぞんぜぬ(福の神)「惣じて松尾の大明神が、神々のさか奉行である、其故に先松尾へしむせいで、神々のうけとらせられぬよ(男)「只今その子細をきひて御ざる

(虎明狂言「福の神」) 9)

(2a)既に法住寺殿をも焼き拂ひまらして、天下を暗闇にないたと聞こえなれば、「左右なうのぼつて軍をせうやうもない;まづこれから關東へ子細を申さうずる。」というて、尾張の國の熱田にゐらるうちにこのことを訴へうずると言うて、京から公朝、時成といふ者が馳せ下つて、義経へこの由を告げなれば、すなはち公朝を關東へ下された。

(天草平家225頁) 10)

(2b)既に法住寺殿焼はらひ、院討ちとり奉りて、天下くらやみになつたるよし聞えしかば、「左右なうのぼつて軍すべき様もなし。是より關東へ子細を申さん」とて、尾張國熱田大郡司か許におはしけるに、此事うったへんとて、北面に候ける宮内判官公朝・藤内左衛門時成、尾張國に馳下り、此由一々次第にうったへければ、九郎御曹司「是は宮内判官の關東へ下らるべきにて候ぞ。

(覺一平家「法住寺合戦」) 11)

(3)或問蒞之説。子曰「不知也。知其説者之於天下也、其如示諸斯乎」指其掌。蒞――説――アル人孔子ノ蒞ノ祭ヲ不欲觀ト云ヲキキテ、其子細ヲ問也。

(応永二十七年本「論語抄」153頁) 12)

9) 池田廣司・北原保雄 (1972) 『大藏虎明本狂言集の研究 上・中・下』表現社

虎寛本には次の箇所が対応している。

(シテ) 夫はいか様な事じや(一のアト) 諸神おほき中に、別て松の尾の大明神と御賞齋被成るはいか様な事で御ざるぞ。(シテ) 汝は此子細を知らぬか。(一のアト) 何共存ませぬ。(シテ) そちもしらぬか(シテ) 神をも信仰する者が、此子細をしらぬといふ事がある物か。松の尾の大明神は、神々の酒奉行じやによつて、是へ進上申さねば、余の神々の、受取らせぬいやい。(一のアト) ハア、加様の子細を、(一のアド・二のアド) 初て承て御ざる。(虎寛狂言「福の神」)

笹野堅校訂(1942)『大藏虎寛本 能狂言 上・中・下』岩波書店

10) 江口正弘(1986)『天草版平家物語対照本文及び総索引』(本文編) 明治書院

11) 梶原正昭・山下宏明校注(1991)『平家物語 上・下』岩波書店

12) 中田祝夫編(1976)『応永二十七年本論語抄』東山御文庫藏称光天皇宸翰 勉誠社

まず、例(1)は大藏虎明本「狂言」(以下、「虎明狂言」と称する)の例で「只今、その詳しい事情(いわれ)を聞いたのです」の意味を表すものと考えられる。例(2a)は天草本『平家物語』(以下、「天草平家」と称する)の例で「軽々しく都に登って戦うわけにもいかない。ここから關東へ詳しい事情を申そう」の意味であると考えられる。また、この箇所は例(2b)の覺一本『平家物語』(以下、「覺一平家」と称する)にも「子細を申さん」の形で対応されている。また、例(3)も「その事情を問うのである」の意味である。キリシタン文献の『日葡辭書』(以下、「日ポ」と称する)では、「シサイ」に「Xisai.シサイ(子細)理由、または、道理(本編)」<sup>13)</sup>のように「理由・道理」の語義に解している。

すなわち、中世時代に用いられたシサイは「事情・経緯・理由」の意味を表すものであったと考えられる。また、〈表2〉で分かるように、シサイは「言う・申す・聞く・問う」などの用言と一緒に用いられていることが多かったと考えられる。

竹浪の指摘にもあるようにシサイは『今昔物語』から名詞的な用法が見られ、その語義は「理由・経緯・事情」を表すものであった。『今昔物語』のシサイの例を、形態を中心として分類してみると、全4例の中で「シサイを問う(尋ね問う)」3例、「シサイを承る」1例のように「シサイ+用言」の形で用いられている。このことから、シサイの名詞的用法は「シサイ+用言」の形で表されるのが一般的であったのではないかと考えられる。また、この用法は中世末期の口語資料である狂言・キリシタン資料・抄物などにもよく用いられるものであった。

次は「理由・経緯・事情」の意味を持っていると考えられる「シサイがある・シサイがない」の用例をみることにする。

## 2-1-2 シサイがある・シサイがない

「シサイがある・シサイがない」を資料別に分類したのが次の〈表3〉である。

〈表3〉「シサイがある・シサイがない」の分布

文献	虎明本狂言	平家物語		イソボ物語	論語抄	
		覺一本	天草本	天草本	応永二十七年本	清原家
シサイがある	54例	6例	10例	2例	8例	2例
シサイが(の)ない	5例	0例	1例	1例	4例	6例
総計	59例	6例	11例	3例	12例	8例

(4) (牛博勞)「中々きひて御ざる、尤あれが申所いちへ聞えて御ざる、さりながら、此牛をもつて、でんばくかうさくいたひて、上下へことへくぐごをしんぜて、馬をもよくかうて、其上にて、笠かけの、こまくらべの、馬くらべのなどと仰らるれ、ぐごをしんぜひては、こまくらべも、何くらべもなりまらずまひ

13) 土井忠生[ほか]編譯(1980)『邦譯日葡辭書』岩波書店

(目代)「汝○(か) 申所尤じや。其よしあれにいふてきかせう、いまのをきひたか(馬博勞)「中々きひて御ざる、其上馬には子細が御ざる、かたつてきかせうませう(目代)「牛に子細があらはかたれ(牛博勞)「畏た

(虎明狂言「牛馬」)

(5a)さて盛國を呼うで、重盛こそ天下の大事を聞出だいたれ。我を我と思はう者共は、皆物の具して馳せ参れ。』と披露せよ。と下知せらるれば、この由を披露した。「おぼろげには騒がれぬ人の、かゝる披露のあるは別の子細のあるにこそ』と言うて、皆物の具して我も我もと馳せ参る。

(天草平家49頁) 14)

(5b)主馬判官盛國をめして、「重盛こそ天下の大事を別して聞出したれ。「我を我とおもはん者共は、皆物ぐして馳まいれ」と披露せよ」との給へば、此由ひろうす。「おぼろげにてはさはかせ給はぬ人の、かゝる披露のあるは別の子細のあるにこそ』とて、皆物具して我も我もと馳せまいる。

(覺一平家「烽火之沙汰」)

例(4)は「馬にはいわれがある」「牛に詳しいいわれ(事情)があれば」の意味であると考えられるし、例(5a)と(5b)は「普通のことではお騒ぎなさらぬお方が、このような通告をなされるとは、何か特別な事情があるに違いない」の意に解することができる。

次は「シサイのない」の例である。

(6) (奏者)「やいやい兩國の百姓はへ参れ《「二人出る」(奏者)「仰出さるるは、同じ鳥をもつてまいつて、一人はがん、一人はかりがねと申上た、さだめて子細のない事はあるまひ、子細を申あげいとのお事じや

(虎明狂言「雁かりかね」) 15)

例(6)は「一人は雁と言ひ、一人は雁がねと申し上げた、さだめて譯(事情)がないことはないだろう。譯(事情)を申し上げよ」の意である。すなわち、「子細がある・子細がない」は「詳しい事情(譯)がある・ない」の意味を表すものと考えられる。

〈表3〉に示されるように「シサイがある・ない」の用法は、「覺一平家」で6例(全35)が用いられているのに対して、「天草平家」で11例(全35)、「虎明狂言」で59例(全130例)が用いられている。すなわち、「シサイがある・ない」は中世末期の口語資料に広く見られる用法であったと考えられる。

14) 百二十句本『平家物語』では次の箇所が対応する。

慶応義塾大學附屬研究所斯道文庫編(1970)『百二十句本平家物語』汲古書院

ソノノチ主馬判官盛國ヲ召シテ、「重盛コソ天下ノ大事ヲ別シテ聞出シタレ。「我ヲ我ト思ハン者共ハ、急キ物具シテマイルヘシ」トソ宣ヒケル、主馬判官承リ馳回テ披露ス。ヲホロケニテハ騒キ玉ハ又人ノカカル觸ノナルハ、別ノ子細有ニコソトテ物具シテ我モ我モト馳参ル。

15) この箇所は虎寛狂言と大藏虎光本狂言の次の箇所が対応する。

『大藏虎光本狂言集』(全4巻) 橋本朝生編 古典文庫(1990 1992年)

・(奏者)「仰出さるるは、兩國共に同じ日のおなじ時に持て参る事、神妙に思召。さう有れば、同じ鳥を一人は雁と云、今一人はかりがねと申上たが、子細が有らば申上いとのお事じや。(虎光狂言「雁かり金」)

・ソヲ「被仰出ルは兩國共ニ國(國を) 隔て有ニ同じ日のおなじ時に持て参る(参た) 事しんびやうニ思召。乍去同じ鳥を一人は厂と言一人は厂金と申上た子細があらば早ふいへ(虎光狂言「雁厂金」)

次は「そのシサイは」の例を見ることにする。

### 2-1-3 其のシサイは

次の〈表4〉は「其のシサイは」を文獻別に分類したものである。

〈表4〉「其のシサイは」の分布

文獻	虎明狂言	平家物語		イソボ物語	論語抄	
		覺一	天草	天草	応永二十七年本	清原家
其のシサイは	17(3)例	0例	8(2)例	3(1)例	0例	0例
總計	20例	0例	10例	4例	0例	0例

(7) (賣手) 「おしりやらずは尤もじや、して、其すゑひろがりをおぬしはみた事があるか (太郎冠者) 「是は都人ともおほへぬ事をおほせらるる、それをぞんじたらは、是をかはふと申さうが、存ぜぬに依てよばはりまらす (賣手) 「尤あやまつた、それについて、そなたは仕合な人じや (太郎冠者) 「其子細は何とした事でござる (賣手) 「都に人おほいといへども、某が、すゑひろがりやの亭主でおりやるよ

(虎明狂言「すゑひろがり」) 16)

(8) 各々その分別をないて、「貢を捧げうことは、その謂がない」と云うて、勅使歸つてこの由を奏し、「ただ義兵をもって攻めさせられうことも難からうず。その子細は、かの所にエソボという學者が一人居住仕る。これを召されぬほどならば、たやすう攻め伏せられうことは難うござらうず」と申せば、

(天草イソボ428頁) 17)

『狂言集の研究』の頭注では例(7)に「そうおっしゃるわけはどうしたことですか」という語釋を与えている。また、例(8)は「ただ、義兵をもって攻めようとすることも難しいことであろう。その理由は」の意味であると考えられる。

「天草平家」の「其シサイは」の例を「覺一平家」と比較した結果、3例が次のように「その故は」と対応していた。

(9a) あまりのことに衣紋の書きやう、烏帽子のためやうまでも、六波羅様と言へば、一天四海の人々みなこれを學ぶほどにござつた。まことになにたる威勢、位のある人をも、蔭ではいたづらものはそしらいでかなはぬものなれども、此の清盛の世盛の程は聊かゆるかせにも申すものもござなかつた。その子細は清盛の謀に、十四五人の童を三百人そろへて、髪を禿に切りまはし、赤い直垂を着せて使はれたが、京中にみちみちて往返つかまつた。

(天草平家11頁)

(9b) 衣文のかきやう、烏帽子のためやうよりはじめて、何事も六波羅様といひてんげれば、一天四海の人

16) 虎寛本狂言では次の箇所が対応する。

(賣手) 是は身どもがあやまつた。すれば和御料は仕合なものじや (太郎冠者) 仕合と申て、見えた向の者で御ざる。 (虎寛狂言「すゑひろがり」) (虎光狂言は虎寛狂言同様)

17) 大塚光信・來田隆編(1999)『エソボのハブラス』清文堂出版



皆是をまなぶ。又いかなる賢王賢主の御政も、攝政關白の御成敗も、世にあまされたるいたづら者なンドの、人のきかぬ所にて、なにとなくそしり傾け申事はつねの習なれども、此禪門世ざかりのほどは、聊いるかせにも申者なし。その故は、入道相國のはかりことに、十四五の童部を三百人そろへて、髪をかぶるにきりまはし、あかき直垂をさせて召しつかはれけるが、京中に満ち満ちて往返しけり。(覺一平家「禿」)<sup>18)</sup>

これ以外には「かようにして」と対応する「其シサイ」の例が1例見え、他の例は対応する箇所が見当たらなかった。このように、中世末期の口語資料において「其シサイ」の意味の中には「その故は」と類似するところがあったと考えられる。ちなみに、「故」は「覺一平家」に65例、「天草平家」に29例用いられている。「覺一平家」で「連体詞+ユエ」が23例用いられているのに対して「天草平家」には5例用いられている。また、「覺一平家」の「故」を天草本では「コト」に置き換えている例も見える<sup>19)</sup>。

また、〈表4〉から分かるように、この用例は「シサイ+用言」「シサイがある・ない」より少ないことと、口語資料に見えることから中世末期の口語資料に用いられる新しい用法であると考えられる。

結局、「事情・経緯・理由」の意味で用いられるシサイは、名詞の用法として中世末期の口語資料でも広く用いられていたと考えられる。

次は「支障・問題」「議論・問答」などの意味を持つシサイの用例をみることにする。

## 2-2. 「支障・問題」の意味

まず、「支障・問題」の意味で用いられるシサイの用法を整理したのが次の〈表5〉である。

〈表5〉「支障・問題」の意味で用いられるシサイの形態的分類

文獻	虎明狂言	平家物語		イソボ物語	論語抄	
		覺一本	天草本	天草本	応永二十七年本	清原家
別の子細無し	0例	3例	1例	0例	0例	0例
子細有るマジ	0例	1例	1例	0例	0例	0例
子細もない	0例	0例	0例	0例	4例	6例
子細無し	0例	0例	1例	0例	0例	0例
何の子細があらう	0例	0例	0例	1例	0例	0例
總計	0例	4例	3例	1例	4例	6例

18) 百二十句本『平家物語』では次の個所が対応する。

衣文ノカキ様、鳥帽子ノタメ様ヨリ始テ、何事モ六波羅様ト云ケレハ、一天四海ノ人皆是ヲ學ブ。如何ナル賢王賢主ノ御政攝政關白ノ御成敗モ、人ノ聞サリ時ハ、何ト無ク世ニ余タル徒者ノ誹リ傾ケ申ス事ハ常ノ習ヒナルニ、此禪門ノ世盛ノ間ハ、聊カ人ノ聞ネハトテモ坐ニ申ス者ノナシ。**其故ハ**、太政入道ノ謀リコトニ、十四五六ノ童部ヲ三百余人整テ、髪ヲ禿ニ鍛回シ、赤キ直垂ヲ着セテ、召仕レケルカ、京中ニ充満テ往反シケリ。  
(百二十句平家 13頁)

19) 拙稿(2002)「中世における「コト(事)」の周辺」『専修國文』第70号 専修大學日本語日本文學會

(10a)鳥羽にて判官に申けるは、「とねり・牛飼など申物は、言ふかひなきげらふのはてにて候へば、心あるべきでは候はねども、年ごろ召しつかはれまいらせて候御心ざしあさからず。しかるべう候ば、御ゆるされをかうぶって、大臣殿の最後の御車をつかまつり候ばや」とあながちに申ければ、判官「しさいあるまじ、とうとう」とてゆるされける。なのめならず悦で、尋常にしゆぞき、ふところよりやりなほりとり出し、つけかへ、涙にくれてゆくさきも見えねども、袖をかほにをしあてて、牛のゆくにまかせつつ、なくなくやつてぞまかりける。

(覺一平家「一門大路渡」)

(10b)鳥羽で善経のお前に進み出て申したは：舍人牛飼ひと申すは、げらふの果てで心あらうずる身ではござらねども、年頃のよしみをいかでか忘れ奉らう？しかるべくは、御免を蒙り、今日大臣殿のお車をつかまつちたいと、申せば：情け深い人で、さうあらうずるとあつて許されたれば、三朗丸は泣く泣くお車をつかまつたが、道すがら車の内をのみ返り見て、涙せきあへなんだれば、見る人も袖を絞った。

(天草平家350頁)

(11a)○子曰可也ーートハ子細モナイト云ホト□ノ心也。貧ニシテ不諂富テ不驕子細モナケレ共、猶ヲソレヨリモマシタルコトモコソアレト云心ソ。

(応永二十七年本『論語抄』64頁)

(11b)子曰可也ー可ハ十分ニヨウハナイソ。子細モナトト云程ノコト也。

(清原家『論語抄』20)

(12)しかるところにエソボ畠より歸り來れば、かの柿を預かったものども思ふやうは「よい幸ひちゃ、いざこの柿を兩人して取り食うてその咎めのあらうずる時は、口を揃へてエソボにこれを言ひ負せて、こちはそらうそ吹いていて、『あれこそその熟柿をば食べたれ』とはねかけうずるに、何の子細があらうぞ」と談合して取って食した。

(天草イソボ410頁)

『時代別國語大辭典(室町編)』(以下、「時代別」と称する)では「子細無し」の語義を次のように解説している<sup>21)</sup>。

**子細無し** ①呈示された事態を、とやかく論ずべききものではないと、消極的に肯定するさまである。②これといった障りもなく、難なく事が遂行されるさま

また、『平家物語』の頭注でも例(10a)を「差し支え有るまい」という語釋を与えている。これに對して、「天草平家」ではこの個所が「さうあらうずる」に置き換えられている。また、例(11a)と(11b)は『論語抄』の例で「子細も無い」は原典の「可也」に對應するものと考えられる。『大漢和辭典』は「可也」を「【可也】①よろしい②まあよろしい」の意味を當てている。また、②の用例として『論語』のこの箇所が引用されている。すなわち、これらの例は「差し支えない様・問題にならない様」の意味に解すべきであると考えられる。

例(12)は「天草イソボ」の例である。「天草イソボ」には「支障・問題」の意味を持つ用例とし

20) 坂詰力治編(1984)『論語抄の國語學的研究』(影印篇) 武藏野書院

21) 『時代別國語大辭典』(室町時代編) 室町時代語辭典編修委員會編(1985~2001年) 三省堂

ではこの一例だけが認められる。この箇所にも井上章は次のような譯を當てている<sup>22)</sup>。

「…中略…あいつこそその熟し柿を食べたんだと、あいつの所爲にするのに、何の面倒があろうか、たやすいではないか」と話し合って、取って食べた。  
(636頁)

また、シサイの語釋について次のように述べている。

【子細】もとは「詳しい内容・ことわけ・いわれ」などの意であるが、ここでは「かれこれ言われる程の事情・差し支えの事柄」の意である。  
(639頁)

しかし、シサイが「差し支えない様・かれこれ言われるほどでもない様」の意味に用いられるには〈表5〉のような形態を整える必要があると考えられる。また、この用法は狂言にはその例が見当たらないことにも注目したい。

### 2-3. 「論議・問答」の意味

「論議・問答」の意味を持つ形態としては「子細に及(ぶ)ばず」があげられる。これを文獻別に分類したのが〈表6〉である。

〈表6〉「子細に及(ぶ)ばず」の分布

文獻	虎明狂言	平家物語		イソボ	論語抄	
		覺一	天草		天草	応永二十七年
子細に及(ぶ)ばず	0例	8例	3例	0例	0例	0例

(13)さる然るべき公卿・殿上人は「あはれとく御裁許あるべきものを。昔より山門の訴訟は他に異也。大藏卿爲房・太宰権帥季仲は、さしも朝家の重臣なりしかども、山門に訴訟によって流罪せられにき。況や師高ななどは事の數にやはあるべきに、子細にや及べき」と申あはれけれ共、大臣は祿を重じて諫めず、小臣は罪に恐れて申さずと云事なれば、をのをの口をとち給へり。

(覺一平家「願立」)

(14a)「晝は人目が繁うござるによって、夜よにまぎれて参った。このほど院中の人々軍兵を集めらるることをばなにごととか聞かせられた？それは比叡の山を攻められうずためと聞いたと、こともなげに言はれた時、行綱近う寄り、小聲になって申したは：その儀ではござない、ひたすら御一家の上とこそ承ってござれ。法皇も知ろしめされたか？子細にや及ぶ：成親卿の軍兵を集めらるるも院宣とてこそ呼ばせらるれ：

(天草平家22頁)

(14b)「晝は人目のしげう候間、夜にまぎれてまいって候。此程院中の人々の兵具をととのへ、軍兵をめされ候をば、何とかきこしめされ候」「それは、山攻るるべしとこそ聞け」と、いと事もなべにぞの給引ける。

22) 井上章(1968)『天草版伊曾保物語の研究』風間書房

行綱誓うより、小聲になって申蹴る羽、「其儀では候ハズ、一向御一家の御上とこそ承候へ」「さてそれは法皇もしろしめされたるか。」「子細にや及び候。成親卿の軍兵めされ候も、院宣とてこそめされ候へ。

(覺一平家「西光被斬」)

「時代別」は「子細無し」と同様、「子細に及ぶ」「子細に及ばず」も別の項目として立て、次のように記述している。

**子細に及ばず** 呈示された事態を、とやかく言立てるまでもなく、そのまま受入れざるをえないさまである意を表す。

**子細にや及ぶ** 呈示された事態を、とやかく言立てるまでもなく、敢然と受入れることをいう。

「時代別」の譯を考慮すると、例 (13)は「ましてや師高などは取るにも足らぬのだから、議論にも及ばず」の意に、例(14)は「法皇もご存じのことなのか?」の答えとして「言い立てることでもない」の意に解することができると考えられる。

すなわち、「子細に及 (ぶ) ばず」の形態で用いられる場合には「言い立てる (議論・問答する) までもない様」の意味に当たると考えられる。

ここまで考察を試みた結果、中世末期の口語資料で用いられているシサイは、本義である「詳しい事情 (わけ)」の意味で名詞的に用いられるのが一般的であり、慣用的な表現としては「子細に及 (ぶ) ばず」「(別の) 子細無し」の形で用いられる用法が認められた。

#### 2-4. 「ところ・こと」の意味

中世末期の口語資料に用いられているシサイの用例の中には「ところ・こと」の意味に解釈できる例が見える。

(15) (主) 「やい八兩人の者、よび出すは別の子細でなひ、いつも一人使にやれば道よりをして、ゆさんをしおつて、ちやつとかへらぬ、ふたりやつたらは、さやうにゆさんかなるまひ程に、はやうもどらうずる、此文を二人して、さこの三郎所へもつてはやうもどれ

( 虎明狂言「文荷」)

(16a)(夫)「是は越後の國、まつ山がのもので御ざるが、そせうの子細ありて罷上り永々在京仕り、そせうこと八くあんどし罷り歸る

(虎明狂言「かがみ男」)

(17) (舅)「罷出たる者は、爰許にかくれもなき、うとくなる者で御ざ有、某ひとりむすめをもつて御ざあるが、はう八よりもらわせらるれども、ぞんずる子細の有てしんぜぬ、とかくわれらがやうなるものは、算用がたつせねはまかりならぬ、いかやうの人でもあれ、さんようさんかんのたつしたる御かたを、むこにとらふずる、先高礼をうたふ

(虎明狂言「さひの目」) 23)

例(15)は「二人共に呼び出したのは別の事でもない」の意味であると考えられる。このように「呼び出すは別の子細でもない」の形で用いられる例は、この箇所の外に2例が見当たった。しかし「虎明狂言」の他の曲には次のような表現も見える。

(18a) (勾當) 「わごりよよび出すもべちの事でもおりなひ、此間は西山東山の花ざかりにて、きせんくんじゆをなすといへども

(虎明狂言「さるざとう」) 24)

(18b) さ「なふ。わごりよをよび出すもべちの事ではおりない。此間にはし山。ひがし山のはなざかりにてなんによらず。はなみに出て。きせんくんじゆをなすといふかまことか

(虎清狂言「さるざとう」) 25)

すなわち、狂言で用いられている「別の子細でもない」は「別の事でもない」に近い意味ではないかと考えられる。例(16)はシサイは「紛争・出来事」などと言い換えることも可能であるが、他の曲では次の例のように「訴訟の事」を用いている。

(19) (大名) 「罷出でたる者は、東國にかくれもなひ大名です。そせうの事有て永永在京仕る處に

(虎明狂言「入間川」)

また、例(16a)より時代は遅れるが、次の例(16b)の「虎寛狂言」では「訴訟の事」になっている。

(16b) (シテ) 是は越後の國、松の山家の者で御さる。某訴訟の事有て、永八在京致す所に、訴訟思ひのまゝに叶ふて御さるに依て、國許へ下うと存る。

(虎寛狂言「かがみをとこ」)

また、『平家物語』においても次のような対応が見える。

(20a) 西光はこのことを聞いて、さてはわか身の上ちやと思つて、鞭を打つて、院の御所へはせまゐるところに、平家の侍ども道で馳せ向うて、「西八條へ召さるるぞきつとまゐれ」と、言うたれば：「申し上ぐる子

23) 虎寛本狂言では次の箇所が対応する。

(舅) 罷出たる者は、此當りに住居致す大有徳な者で御座る。某娘を一人持て御座るが、愆てわれらごときの者は、算勘に達せいで成りませぬに依て、何者に依らず、算勘に達した者を簪に取らうと存る。先此よしを高札に打つ。一段能う御座る。さらば太郎くはじや呼出し、此由申付。汝呼出す事別成事でも無い。高札の表に付て御殿の見へた成らば、此方へ申せ。

(虎寛狂言「さいのめ」)

24) 虎寛本狂言と虎光本狂言では次の箇所が対応する。

(シテ) 別成事でもおりない。聞ば西方の花が盛じやといふに依て、けふはそなたを同道して花見に行うとおもふが、何と有うぞ

(虎寛狂言「猿ざとう」)

シテ「別の事でも折無。聞ば西方山の花が盛りちやと言ふに依りてけふはそなたを同道して地主の元へ花見に行ふと思ふが、何と有うぞ

(虎光狂言「猿座頭」)

25) 林田明(1972)「虎清本狂言」『近代語研究』近代語學會編 武藏野書院

細があつて院の御所へまゐる、やがて歸り參らうと、言うたれども

(天草平家25頁) 26)

(20b)西光法師此事聞いて、我身のうゑとや思けん、鞭をあげ、院の御所法住寺殿へ馳參る。平家の侍共、道にて馳むかひ、「西八條へ召さるぞ。きつと參れ」と言ひければ、「奏すべき事あつて、法住寺殿へ參る。やだてこそ參らめ」と言ひけれ共

(覺一平家「西光被斬」)

上記の例は「天草平家」の「申し上ぐる子細」を「覺一平家」には「奏すべき事」が対応している用例である。また、例(17)は「存ずること・ところ」などの意味であると考えられる。

次は「存ずるシサイ」が「存ずるムネ」と対応している用例である。

(21a)さて門どもことごとく開いて、ただ一人待つところに、夜半ばかりに出羽の判官と、源大夫判官、都合二百騎ばかりでおし寄せたが、源大夫判官は存ずる子細があると見えて、門の前にしばらく控えたに

(天草平家110頁)

(21b)源大夫判官兼綱・出羽判官光長、都合其勢三百余騎、十五日の夜の子の剋に、官の御所へぞ押寄たる。源大夫判官は、存ずる旨ありとおぼえて、はるかの門前にひかへたり。

(覺一平家「信連」)

すなわち、室町末期の口語文獻のシサイには「コト・トコロ」に類似するものがあつたと考えられる。

### 三. おわりに

以上の結果から、中世末期の口語資料に用いられているシサイの意味には、本義である「詳しい事情（理由）」を表すものと、慣用的な表現で用いられるもの、さらに現代日本語では用いられない抽象的な意味を持つ「コト・トコロ」の用例もあつたことが分かつた。また、名詞的な用法で用いられる場合は本義に当たる「詳しい事情（理由）」の意味で用いられるのが一般的だつたと考えられる。

今後は近世の文獻を中心としてシサイの意味と用法を考察してみたい。

---

26) 百二十句本『平家物語』では次の個所が対応する。

西光法師モ此事ヲ聞テ、院ノ御所法住寺殿、鞭ヲ揚ケテ、馳參ル。平家ノ侍トモ道ニテ行合ヒ、「西八條へ急ト參ラルヘシ。尋聞召ヘキコト有ルソ」ト云ケレハ、「是モ法住寺殿ニ奏スヘキヘ事有テ參ル也。トテ通シ」トシケルヲ、「憎奴原カナ、サテ云セソ」トテ、馬ヨリ取テ引落シ、中ニク、ツテ西八條ニ參リ。

(百二十句平家93頁)

## 【参考文献】

- ・金田一京助[ほか](2002)『新明解國語辭典』(第五版) 三省堂
- ・土井忠生[ほか]編譯(1980)『邦譯日葡辭書』岩波書店
- ・土井忠生[ほか](1985～2001)『時代別國語大辭典』(室町時代編) 三省堂
- ・諸橋徹次(1984)『大漢和辭典(修訂版)』大修館書店
- ・漢語大詞典編輯委員會 漢語大詞典編纂處編纂(1986-1994)『漢語大詞典』上海辭書出版社
- ・池田廣司・北原保雄(1972)『大藏虎明本狂言集の研究 上・中・下』表現社
- ・井上章(1968)『天草版伊曾保物語の研究』風間書房
- ・江口正弘『天草版平家物語對照本文及び總索引』(本文編) 明治書院 1986年
- ・大塚光信・來田隆編(1999)『エソポのハbras』清文堂出版
- ・梶原正昭・山下宏明校注(1991)『平家物語 上・下』岩波書店
- ・清瀬良一(1982)『天草版平家物語の基礎的研究』溪水社
- ・坂詰力治編(1984)『論語抄の國語學的研究』(影印篇) 武藏野書院
- ・佐久間鼎 (1983年複刊)『現代日本語の表現と語法』くろしお出版 60頁～61頁
- ・笹野堅校訂(1942)『大藏虎寛本 能狂言』岩波書店
- ・中田祝夫編(1976)『応永二十七年本論語抄』東山御文庫藏称光天皇宸翰 勉誠社
- ・井手至 (1967年)「形式名詞は何か」『講座日本語の文法3』明治書院 37頁～52頁
- ・竹浪聰 (1983年)「「子細」について(上)」『日本文芸論集』第9号 山梨英和短期大學日本文學會 34～53頁
- ・林田明(1972)「虎清流虎清本狂言」『近代語研究』近代語學會編 武藏野書院 79～176頁
- ・劉相溶(2002)「中世における「コト(事)」の周辺」『専修國文』第70号 専修大學日本語日本文學會 79～100頁

## 要 旨

本稿は「シサイ（子細・仔細）」の意味と用法を、中世末期の口語資料を中心として考察したものである。

考察の結果、「事情・経緯・理由」の意味に用いられるシサイを形態的に分類すると「（その）シサイ＋用言」「シサイがある（ない）」「そのシサイは」の三つに分けられることが判明した。

まず、「（その）シサイ＋用言」の用法は、『今昔物語』から用例が見え、中世末期の口語資料にも広く用いられていることが分かった。また、この用法は現代日本語においても見られる用法であると考えられる。

これに對して、「シサイがある（ない）」と「そのシサイは」は、中世末期の口語資料にみえる新しい用法であることが分かった。

「事情・経緯・理由」に比べて「支障・問題」「議論・問答」の意味を持つシサイの例は、慣用的な表現として僅かに用いられていたことが分かった。

また、僅かではあるが中世末期の口語資料には、「ところ・こと」の意味に用いられる例が見える。「ところ・こと」の意味を持つシサイの用法は、現代日本語ではあまり用いられないものであると考えられる。

キーワード：シサイ(子細・仔細)・形式名詞・中世の口語文獻・狂言・抄物・キリシタン文獻

투 고 : 2005. 5. 31

1차 심사 : 2005. 6. 11

2차 심사 : 2005. 7. 2

住 所 : (110-810) 서울시 종로구 동숭동 190-3 7/3

電 話 : 02-765-2456

e-mail : yookim21@hanmail.net